1963
67

# 山あらし

自序

山嵐と狂号すれども康秀が
古詠に暮ふかみ。あらじと一日
街上ふ家猪とつゝ優揚戯に
見るゝ畫工異獣に丹青し

1963
67

内ふ緒一蹄ふ
冊子に切ふ
古文の看板ふ出し。不信種表
木戸番とふ
鐵鏈ふ吟し。
行ふ和語ふ號で

俗眼ふ惑はしいと。実ハ
かゝ豚ふし。人ふ化を術も
なふ。害も無し。讀ん
ぐ易ふ。讀ぬぐ支かけぢと。
大半二ぐ徒のかと老爺ふ識ん

ゆ恐し看板ふ宣言すし。
亀の毛ゆりく葦ゆひ兎
のつの屋ゆ赤ちと

## 一

川竹の流ふるえみる藪野陰
者ハ亀と日本のごもくを葉陰
花も白ゆ人引と吉原と陰時
ちる八浪人者の武者行象
時ごろえ代

茶屋泥

## 三

神と仏の名ふ方ぶ裏
ゆとちハ浮七立ち湿中ゆ
てつちと見八功徳池の水
ゆナ偏をゆぐ世
第えぐち屋つ誌話
誌

別屋泥

海道酒屋物語

理常総憂中

春花見梅

第一番目

二立て目

# 序の段

やよあらし

## 一 浅草の段

安養世界の大立物天堂の釈玉株獻世音
善薩の御指図願ひしからぐ東都の東北つ
ゝ浅草の寺舎いまらんとぐ人あつうどぐ人あつ来門
あつ武家あつ家来の家人いとうぐ雷

門に這ひ入る儒者の鬼形連鼓と王充が空言に
ちひ出し神道の夜講南ちやぐの徒の龍雷の
口傳と赤ちやのぶひいい出さるれば中ふ風
の神が伐ちりつと人者の皆中に
ちがと身ぶりうとと弟の仏工もあんちら
さふとちううどし走女が池の外ちどさふ
ちが世間とふちのあちふんけりと
くちりゆるい屈

原に乗りとと鳥の豆ふ女が揚枝
うちちぐら拾ふく走ふ高風が書
ふふふふりおいぐひやうぐん銀杏ふ
月因果地獄の縁記ハ犬八ち駒ふ演説を栗
島の前ふわぐうもわ移び熊谷稲荷ふあん
りうふうりうぐのいやらほ小町も奴婢ふほうふ
ぐれ娘喜撰の茶ひうとひうう右も従者とと

唐土息子業平橋にゆかりある前座巴屋は
始めのきはらへ棟はさがりたる料理茶屋と
しぐのさんくやまきさらくかまりとのゆげ
さらさくをうかふ似孔明が矢も炭ふ
とう得べくまうとこの大まらくとめぐく
良秀が石動るかく下斗もをうさん
河豚の鉄炮ハあまはさうをしじまうつのびどう

こゝ橋の谷の群はいか松江の鱸は湖ふなそ
首陽山の蕨蛤子湲ふわをさかでもゆそよは
らび琴高も湲ふ来らびろくとはきはあかず
まうびし夕峰のあらん萬好う闘がとるよおら
ん生田川のまゆらび函谷関のかしかえん
どう三千世界ゆがくらるはしきつのりとて
ゆ鯨のたやさ白魚のあくみがうきりさんろ

[illegible]の老ふかうがう頃い春三月立
[illegible]里ふ雲の[illegible]居[illegible]二十
軒の茶屋ぐ[illegible]ぐふこ[illegible]ぬけとこれと
[illegible]男いる本町[illegible]の息子株
間語
[illegible]名ぐ梅[illegible]六郎[illegible]諸国状さしふ
[illegible]
[illegible]ぬのぐめぐらしうれどこの

[illegible]の[illegible]の日の長
[illegible]ふ[illegible]茶やふ這入
[illegible]の所医記名ぐ[illegible]といひん
[illegible]中ぐん加ふふる時い唐本ぐ
[illegible]ふ一抱子[illegible]かる本[illegible]名侯
足下実ふ[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]ぐ梅
太郎ぐ顔[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]ぐ

さてもいつわりしこしらへかくてとゞ梅太郎も
ちからひきけしのみとくもげんきをうしなひあわれなるさん
なるにへふわちりにあらさかりてアイさちさんさト
かけのぼりしの此柄太郎さまうちの寝堂咲と
いふ一蛛と竜蛸のちぎりわさかけてぞ此ふくぶん
めぐみかんむりもおむしま〳〵お腹の扇ぐ袖
のぼりめとりつぶらざさきたるわへご公の妓の

所へろへやしとがびひ足下は唱導して格子
やぐ来て公ろとゆきさきしく玉ぎはね
まぐさやしくはら悪月ござうだとふくさと
からさまる遊ふろ浪さゞしくみくホイとひ
つの矮屁の松上へとつくさた柄右子足下
写偽の蚤庵へかゝる跡まんずうせんきんうらそう
あやまりて如真ごのくれ煙管の長ばくへる

ところへうろくとおやしさまらくくん娘二三人通り
かゝるまゝ夕めのびきしてホウいろとの涼気めや
実に絶世の佳人だされに帯留めるまとこれ
まさびりとい屁んとのつもり物とふをちかけの
方年のとひれれどけ給へ朝に沢村眠山かみる
わとこゝろぶらう義之が墨跡に倉山荘の
色紙にすりめしへかイヤ又あとからとし

よろこうをとうふれぞゞふちやもくやさとく
まえまゝびく入ぞちら出たれのめのひさとさ
ぐ百度るへ一のさしひうふ不信が詰があのやと
まづかりしが良人ろきめの不憶忍しくかやさとくと
まとめ病根とこうく陰虚火動の症ご腎気丸
御のちひくも治しかるのえちめきさうじてござる
いくれへ実に沈魚落雁ともいはさうは茶や

の女うさぎ行ちんぐらがん行ちと
ちとしぐさうらうしかやとうふしし
うくいうてよりの和尚ごとうほどちく
いうにぐまたちやうやとふ柿さん一笑
の説話ぐあるとと足下もちうくかるちんちうぐ
二所目の故のだんくたごうてまちうらう
一笑の去心わぐとうんぐのいかかやとと

一ち国中ふうくからうんとうらうん
いうくく燈下ハあのぐ見手ぬさしあとと不佞
ぐ名ぬわるとしとちぐきんちうしし
いうちうちもん死ぬうたとあぐく
いふと其ん[illegible]く刃ぬうちぐとうしあとと
桑王樹ハうくちんとうぐうるうにぐ
いうとあとと昔の五連点ぐうわぐとあとさん

さるまへがみたしとやらむすこハ離戸ぶが江ゟ説に
きくまゝれハ娘男ありそかのきざゞうさとく
が足おもつく京町へ紀通習ハふりて一所が
本人石女にのがきりまふ仰くとゐろしが
店アがるまろうがせやまう床へとろやうに暗
いとゞかうゑ息しろがくまうまめへ行二丁目
かゝ今とらのぞんにとのとゆくう子のかう

まう泳文字んてよりに床うちつくろう女へ沢ろへ
ちゆんてやりて後朝に一ちよ首ほそまうやして
ちよぶへくの振袖ぐとめてもきるがいとしめから
ぬめみがく羽ろうもひきちぬるもろぶじめのときみろ
さいやしてぶるまうくたがんにがくしずかなかると
やしきりて色きとんぐとろうてに柄太郎と
うつくあまがてへめ々ゐとゝろうどてめのぶら紙

[illegible]
[illegible]門口ふ池上 水代千日講の札ふ
[illegible]と決し竜王ほ[illegible]ぐ[illegible]るい太工と
又えんこの間ぶすまうろ[illegible]ちゆく[illegible]ぐ[illegible]し
三又の[illegible]ろ[illegible]ろ[illegible]ふ小僧一人りゆ[illegible]ふ伯太郎ハ
[illegible]ひく[illegible]ろ[illegible]ふ[illegible]ふ甚[illegible]ろ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]

[illegible]のこしぐ[illegible]ふ目録のめけがら愛
[illegible]ひ[illegible]ろ[illegible]ろ緯川[illegible]ろ[illegible]と[illegible]ぐ貸本ゲ
小冊の袋[illegible]ぐ[illegible]ろ[illegible]ぐ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ
[illegible]ろ[illegible]ふ浄菴[illegible]ろ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ

めいぼくのふるてつぢせ足下もぐつぐ口ぐちぬく
ちりたとうこんの上ちらみさいとんくやう術
太郎ちゑ入れくくうとぞうぞのわうちの志ちう
ふうんこあるからいさまハうしちのわうかう
あちこちぶいうこんこうぐく術ちゑんたにぐうこや
ぢうちまいじちくるうちゑんとりふ私語ぐ屋くる
ぐけうんけぐぐとおうちゑんの妓もふ天ふ六倫の

わつく
黒雲ぐさぐけく虫くもく松花堂ちゑんとこと
ちゑのいやきさんぐくきにたちゑんくみちうきの
やうちゑ学ぐあうぐぢうちぐく弘安の年号ぐある
と池上ちうちゑやちんぐ出るうぐてちゑやぐ屋ちう
極
術太郎ちうちんあちんぐかちゑやうましいお
ちくことさぐ三ぶいつのとうちゑかぐぶちゑん
ちうちんをしみつ西ちのうちゑやちうちゑしさ

うばはちよつとおきあがつてわきのはし
ホイこのやうなうつくしい金をくふ
菓子(くわし)のかはりにくふ桃さんをとうぢ
玄関(げんかん)がめつきりやぶれ返簡(えん)をかく
おきるもとうりのかちやく不動(ふどう)様の
うちふかうでもおもひきつてとかうさしや
けのあかんぼうをとりて桃太郎をやしなふ

おう小僧(こぞう)どん茶(ちや)をくんでくれと二口呑(のん)でふうといき
ひろげあふぎはあふぎかくしておきのやく
とうちやくとうか身ぐるみんぐるみふこの
日まつやうにてわる桃太郎をかしてあげし
とわふのとおんぶるふさげるのさゝのくふも
そのとなりてゆんそのそわくらぐへと
ふくめてもわまへんまでまでまでかへさずかる

まゝせんはさくわうむかうさこの又三の拐れ
こんらやへこともろかくのえめんの所へ喜ら老
人の五座(ざしき)ねとおゆそかくぶうくまうわとめ
やうどうの紙(えん)青やうらのどうぞやまし
古学(こがく)もちなまめくまんまんおなのくれけ
どうし内々 らうだくろめ浮しめしとく
さうなおまつりといふあめもまうらや

ども小人の店(ふちらん)替ぬ様秦張(ふんそうざ)役がだんぶ
ふうりくいひそけぶをうるもおかしイヤこよ五稲太を
さ以甚夕主人いおうまをねとりの小稲太をもとう
ふしらの内かく乞やうせしてん先生(てんせい)今日れ
おやまておとういうくまばハイとれ愛宕(あたご)へ小太
刀(ち)よとる縄の額(がく)ぬもげほしくうるとさら段損体を
さしてをつさまうさをはしし稍太をも毋足ある

四人のうち三人は小ぶとり
なれども一人は腰ぼそく
ぶきりやうにて
ものごろ十二サイ初めて
ものをぶさたもうんがと四角ばつて答る
新太郎ふさぎしめらうそを書しうそ
ばかりしてこんなものをかくしあと仮名二文字ばかりしるの

とぶひ三年とやくあるひとくあやか
苦労をかさねまもん時ゝ先生申ふるの
くるはてどもでござんまし先生ゝとゝ
顔をゝ上野飛鳥ゝ吟唐ゝ方ゝ花
ゆうとゝうちとゝふとゝまとゝさりてを
箱根ゝこうちよ四ゝ屋敷とゝ出見せう
出たれとゝやかのせとゝ賣ゝはまゝまだと

おくゆかしくおもふ人なれば何よりおもひ入て下のうで
こそ〻まれ江へ其町とうりつゝまを
吉原の事てこそもまれ人のイヤ節力
たしさのゝ糸屋地てこそ見て郭ハ
けすの笠しも出花と柳の巷を見て
まつをかの色のうひこそ致すなよりも
もつとん変とゝ屋たつの故梅太郎を

なんつこそ本店の娘のおとゝをめあら
見るようをふちつをつきぐ事て私共ハとんを
ていちんたちまんてもとゝまつをん四角な
字てよるのを口といの字をかぐこぐり
まんといの和いの字ぐりと仕あぐ小ぐ
きいて長て梅さん〻私を此間四角な字と
一字おろくまつる森太郎をきんをこゝあを

きまの四角なる子をまんなかにいるハ蘭と
いふ子ゝ雷の子とたてくくふかく
まきめてイヽエとふ
えの障子て皿といふ子ひろげ〳〵まきと

## 二 心中の段

ゆきふる孔雀深きもらをたゝ花鳥ゝ客と

迦陵頻伽の雄のやく伊左エ門が述懐も
うゝ止まん 沖つく戀〳〵すると
源五兵衛ぶ執拗ハ江陵の意氣地ゆ知ら
のゝとさハゝ今朕子の
蔦客〳〵とゝ
なくぐゝ坊主の御覽に凶の出まも
ゝ浅草市の手桶に死ていふ字ゝ書て

いろ〳〵だん〳〵と高賣りの空詰あれ
たるすもゝなる実なると錦の被羅陵の襠
天ぢく〳〵極楽地ごくゝ事皆客の懐ゝ
ゆるとハくらくうどんとゝいたりいせんと
いくもんもんをおくんちゑとうたるとと
訓解まとは今不法の一言に止ふまと
きくゝ客共大ぜ共いくんゝ花とやあるゝ

街のよきかひことふるれいたりよい色ゝ空
手振のもんの染色よあるゝ修行者暗よせき
よゝ日をたゞ春の日とまや異行のふしこ町を
ゝ尺長大きやゝるる提燈茶屋の猿よ柔犬よゝ
らゝあるハ何色の妹妓色男よあふよ真猫の
わゝゝゝんゝ樓のいゝに悪其中よかゝゝの
棚ハ一斤〳〵のとつゝ所やゝゝく行燈よハ紬

の梅うえ葉ありのくきはけ飛行油蚊ふりさし
御園さきうきのうけれある賣人家より雛妓の
あるさしく走り出る地色の屈文のあり宿
ひし子供の紙ちりやち客の羽織よりう
きやさんのきせんあそんていきるのちりこうや
つを客をさしてあのきくいあるまきくのまき女
郎をさしてきやさん唱ふる年増くの志ほし

若者しのいさこさハよひありの間違をなく七
福神の室尺し書くるかよ子をある三味線ハ琵琶
ちぬそさん紙んをれ寂寞うあけきや煙草の
火うをきみしく時ぬすのきよ青ちうて
こうしをうき門よ酎本をくあり走くよ墨よ
を紙をやもあうおまんまんあくくもの線を
かりうを大ふうしく化をハかんさしうんて者一行

と賢ら八ッ寺て内所へのいさきひハ時札のこのり
豆退しきまひれの種ゑるハ未金のたくさんあり
きやけんゑのふの流言ハ大町ときくも所ゑし向
うゑるハいきこゑうへ条文へ若流ゑあんをハき食ら
とたらの内へあしゑくし上猶理珠数さくくれ
うんてハやゑゑ見やあのあ紙さんハ味噌ゑし
て買ゑ豆腐ゑ白こハめしのとうをきてゑる

せ法ゑ来る今人格子の前へ立留り四角ゑう
たたゑゑ白あいゑゑあゑゑれきやアゑきんくら
へゑゑ横ゑきゑやへゑけつゑゑこうけゑゑゑ
をめきあゑゑハゑうしさをやう風ゑ世間知た
ゑうゑと志法ゑゑゑゑ稲荷の神燈ゑゑゑゑ
のこ残ゑ此頃あゑゑの裏ゑ知ゑゑ折の腰障ゑを
たてしハ這入口ゑ物ゑ千駄二三足亭主を

とでてうろうく證文を書てゐると表うらをし
たるけの男一人ハうセうくゐるとうて記ぜんの近
のある子を連 敷方閉めうと上へあうれば女房
茶をくんて出すを一ト口呑て手をたく時よ視方
こねくさ咄しやしさ奉公人ハ是てごさりやす
ものこうちくあるうるいもれて槙本箱のあけ
る板の上へすうきゐ女房すうるの余りのくさ

十八

と蓮根を鼻紙へのせてこうひるくあいさ
る出すをたよりんてかふりをふり涙くんてゐるハ
あのあのや年一さん二両うぬの奉公人ものもあの
きんとの奉公人をうてれくんるさんやしる江津へ
をしるやつて行きやしさうあるをうア四切の二ノ
おやうくるくていてもあさありやせんかくさまうく
てたきやしてうるを王ををしやァこさりやせん此間

寅平なざア川へおつこ女が亭主をもつてもとうた
のがれてぶち流ろさうして二年をとう杉ふて
やしろうけりどうしやしたら亭主ハ證文をまき
あげたつて、そりやア藝者證文でへヱつてゐる女で
あゝれめへその江津なア近地へふん於く五斗の四
大きなへ盃で違つてまたしかねへかしうまへあろう
ねへがねすそのちがア ありやすそテ あつちハまき



やくさなへツむくめつてくせんどあちへよつて見や
したがれがきこていやしたとおつまのつて噺がありて
のう其男を喜世留をまるしなりしうんなしなう
しやあよふくへ亭主ハ火鉢のふちごをいとうしおかえ
く金へうりねへなんやア四文だアなうをもつてく
金の利まひけやすも中どこら五日ニ五百上ぞなう
八百ヵ三味線も一下勘定百五十て立派よなで

商賣仙の咄しこれの人烈(二階)より出る男
ハこの内へさうている女郎の客よりてをうちあつる心
ぶけしすの故ニアよりぬごきんやもをつ捨言葉を
てこのさて此客を送うてあつさる後四人あり一
人ハ楊國忠の内障まるすぎをあつうてう
細腰を事とまつ楚王とこのぶりをあつやセ客
まきのうつ年よ持てす早振てふ髪の毛の

をげしハまこを矢竹より引笑うこ梅干を
はう此内へこきでんのきこのハ年二年一三色青白
く草だるの白酒ハ春待屋のおう咲こふ
花魁ふうの梅太郎しかりをあつぬ中よりう
まこうこの病根まてこの内へさうて再ふう
是を今の客のちをうまうしこ楊枝をく人
でちをなのしこハはうを出しこの鉄鳴き陽

でらんすを打ふり表のうをゝ声すていたこの下の句ぞり蓮のうてるのあるを此寺ひろ咲ゝ耳へ入るゝ聞へあやまり男の嵐うきしてゝとゞつのふりもて表へ出梅さんうのあとと堂咲コレイ是をきうけ此道具ぶんまゝすゝ本羅臺三間のうゝ如き落しの土手はけゝ常盤津連並よゝうひあき示見今名の地

蕊詩おとしの柵きれいすゝて淺草たんかのてい虫の声一ツ撞て道具おさまる

ト向ふ花ゝて梅太郎出るあと

ゝ花流二天寺とふ字のゝ仁んまて六尺棒を持花道の中こうまて

□一梅太郎

△一大門口うんぞうと

一□ むろ咲ハとろくころした

一△ おいてるとたしなし

一□△ かんねんしろ

ト むろて男の子両人をなぶ〳〵迎迎

引連てゑちろまて むろ咲きを出

梅太郎 ゆき あらうぶろうして

顔を見合せ

一柄 ちまさハむろ咲

一むろ 梅太郎さん

ちろて沢うき世よたりひをしゑるとのち

もきゆるあだし心も今ハ又ちろはぬあこのの

梅ゆ ゆきり 梅ト堂義理ちるさけの中たんからち連れ

立てあゑさくちる 中略ちりぬ

せりふ時のうるゑちハ一すと咲ちろ

のくまゝ　ゆう世間さいろ〳〵とかんの女房
ゝ　ゝ　さうやこの手をあめそしめくをそ
格子ゝあやまるゝ心てむなそ〳〵れゝ
くゝをそ代あハよさんせ一日あハ祝ハ家
ユこのゝ文のふしの上書ハ男の公事ゝ志ふ
摺道のくるゝあさあし
ト　せまいさんちゝこのあゝの口きら

しき男稲刈のゝのようなんて出ら
ゝ　ゝ　ゝしハ志ねくまゝ所の屋ゝん
なゝれゝゝを心中地獄とゝゝ
ゝ　ゝを知ゝふゝの口ゝハ志を心中
ゝゝゝゝゝ大方此間志んなゝゝ
流たゝゝ

## 三　かごハれの段

一すとしたことくこうして萩川梅六郎堂咲ち
とめてのあるを幸と廊の方へを見たりを出け本
所の本店へハ昔とうさ木根川の叔父をこのところれ
きりの祝ひも毎ハ耳へたこうてとうあんを思
きりて叔父へふうしをとゝ敬よ迷ふ夜

ちるつゝ錢ハ一文ツゝ指てたしなて玉祭のとう
ちん落る初松魚をふゝ家生貧なれとゝれてすむ
るゆゝとちき箱る微さ物取出してのさハきか
んとゝとゝ暖をゝゝとゝの叔父の高ま金
梅太郎をよゝとゝ堂咲ち加たつきハ近所のてまへ
親又の心ちゝきのありとハあきて先ゝつき別
房の身分とゝり風雅てもゝ考きすきゝ

ゆ
ゆハやうふくあしの山の宿とう山谷とう所ハ志
うとすれうきゝ先木戸きハは雨さしの梵天
土瓶ふくゝ戸まへハ鏡の如く通りの人うつる樂
よ夔の飛ふハ柱ふくゝ棟高く作をゆし
典當舗まて板その隣ハ神道者門は注連縄
引くて何某の国まて神司あるといひやせハ
その志ちやくゝ生てこれハすめ天とは心ゆる地

おとの遣ひこうれくしき説話ハ所先は北耶
輸〳〵異名をとりし女坡あり元来亀王ゝ女房
まとあるゝ其因縁を尋ぬるは近曾旅僧の囲
人とありしゝ楽門の僧ゝ出山の釈迦は修ゝ
そ〳〵支ようして釈迦の女房の縁をとりて耶
輸陀羅女の下略ゝ世北やしゝの神道
者〳〵男女交合せしるを如ゝ細女命の

きてい今のたてまつるとしを祝ましきれりら
して野良よりのやきもらこゝに人の御耳
をふりたてゝ居きて朝夕の飯ハなれし
神風の伊勢屋より流のさんをゝ北をれし
くとゆすとゆるゆる鈴をあゝ鳴ちんらのお
りまと二度けし食客のト者表へ出て人の當
ケ卦本卦ハとゝ巳ゝ身よ幸福の至ゝ



机をらして嘆息し今日ハ雲て人ゝあつまゝなと
いそのハ天かんゝまふゝそゝあまゝぬゝいひ雨ゝ落
てこれハ戸水をれたのもこゝハ巳ゝ要しすゝ神相
要書梅花心易ゝと見おゝゝこゝの間ゝらち
口ありて這入口ゝ孫店一軒あれ袖のふりそゝ
らをぬ放鳥賣ゝあゝら向の鰻魚屋の仕出を
ふちんゝ思ゝ知ゝこの裏ハ面物

又ハ茶屋土弓場の女ゟ居故ゟ玉揃ひゟ
心ゟて孔雀長屋共弁天長屋共異名てゝ這
入口ハせまけれとも真中ゟ空地ありてゝきの手ゟ
新道へぬけゝ角ゟ稲荷の社麹五吉源加一
てんゝのゝ吉ゟ札八九枚とあゝのむゝ咲へ
本町ゟ男女五三人と法ゟ れゝあき地をすゝゟ
小庭ゟ小し裏てゝあき造屋の創意茶屋



かゝゟ備後の五分ゟ遠藤の仰塵さゝ行の
禄頼祈まゝし圭賣ゟ鼈甲地錦をゝませ鳳
尾草玉簪花をあゝゝひし石盤八青苔衣ゟ
似て絵ゝあゝ床の間ゟ碁局象戯盤玉琴三
弦ゟてゝくしハゝゝ潔癖ゝくゝ室咲とゝふ
くゝ七夜のとき乃若のお町ゟ改めきゝゟ白徒
めゝゟはゝまくゝとこ所ゝゟ言葉ゝゟまも

きの大きなるあり綾ぬあり布を堤のごとく
ほどこす喜幾蔵を商賣とする者のあつま
る場所とうりふも朝ごとに賣ひけるい長屋中
て鉄棒のおもりと仇名をとりたるの者やつて
亭主八ゆと者賣まて今ハ夜このこと商賣をお
し夜盗うせしうハ知ん[illegible]の足早く日をしハ
二七のうちとしうこ屋ハ晦日のこいちをうの

九尺二間ハお定りの吹人ま[illegible]拙見るよりも焼市
のおるかの吹さいるる鰯のうしらの残りしハ伍子
胥ゥ軍門の面影を思ひ出し隣へうる壁ハたき
やりうこ[illegible]しの尾つ[illegible]ようすく[illegible]仏さん
まハ院号のあハ戒名ゥ三四まひ出ハうちう
と[illegible]ゥ法げうゥ徳利ゥ三文花をうしハ肉損
て死ゥ先の佛ハのそもゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ飲酒戒

をやぶれといそぬ年の仕ゝ冬ハのまや炭園よ
寒をこのき夏ハあらきの烏法れ邪ナ
よあらい初ゝよやを法るもれとしされとこのあ
るハされあるし角るてるもるれハひ
のこゝんの皮をぬて居て紙屑ゝくゝりこ
是目をあやきんゝめゝゝるとあゝもあるま
ゝして屋まてゝくゝも法りゝれとゝるしの

ゝの種へゝゝるゝゝてゝをゝゝゝゝれゝゝしれ
ゝひゝゝ板事をゝゝれハれゝゝ足法ゝてゝゝゝゝを
ゝ法ゝのゝゝゝゝゝ干物をゝゝ過ゝゝあゝを
ゝゝゝゝ僕の如ゝゝ法ゝひゝゝゝ一ゝゝゝゝゝて
ゝゝ其ゝゝゝナゝゝゝ法ゝをゝゝゝゝゝゝゝ大き
ゝゝゝゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆゑ物ごとおめ〳〵のとち〳〵やにのふのこてをうちあるよ
ありうちのたゝけをてんてをしこかつのて出ていく
もゝ大ひとれめ〳〵をしてあしこけへまつらつて袷
いちまつこをこてをうきまも強くくてる赤きよ赤ゑ
ちへあここいたちのしを何雖の良人いちまつ
のうまうしのうんるいちみまつまるへ彩りをか
ちくてあけくのまてまへ法うてちての夫婦

喧嘩仲人へりちうん居うけ進矢出まて二月
のうちの日指をおりけくまつしたまく袷の九あく
ひをあてをくへ百足ゥうしをうき駐ゥちうの
袋まつうりおりうてこのまう裏
屋まへまくあうりのうれあるへあうりうる
こへたくよたさんうん又い稲おりうと拾言葉を
ひのうくあうれへれ木町へ提燈屋て是紋をう

ゆてはこけをうてはけやはあらさんよくはのて
はなれくあんさうをさきくはのさんや唐鴻へ
茶をうてをうけやナ金目ハ何を出らりやもふモ
今まて大きふ声をしてゐるすんてゐ私ようを
し其まてきこくとよくてあく吸ゆて出すを
のこをくあてる者アよんてこやしくのすあちハ
のちあてはけを給くはのけをうは是てもいて

はけくものこうよをこくいもやくくら陽てくて
ようくをくといもとこくらんてこやや
ちん貝ハ赤ちひうあの者屋を赤ちう蛙
ありましくはやくくちくしもハあちらくハ色
ちと思うていくこくを給くおるう鼠の穴う煙
を出しるうむしうをちんよやて切んをたの
のしまくのと色くあくやや出ずをうあを

思へハもんぢうう川のくまもあり作ハこまゝ
くゝうちうまひ祇夫ハうれぢと呂ゝうう隣の
小間物屋のたゝ枝さん祇ぜんそくちゐさしき
のおまんまうきだつさゝきをふうくゝ
とたうてちうぢひあうのまゐへして一ちで
うあうあうあう物をうぢうしう湯へいく
とゝも湯をもてく祇つるはふうちハ大笑ひ

ぢ祇ゝふまうとうてあのうの子なざアけびきうてゐる
うゝ長屋とちうちやアア見つやせん夫よおうしん
ぢうしひま八唐州生をうゝさをふだうゝ子を森せたる時
あんぢゝとうゝ祇ゝをうちつのきこゝやをあゝ
いゝと此たゐるもゐゝ長屋の士妓ゐゝ泉香
の戻のあるゐうよかうしへゐるくうんをて去
も湯をはうひまつゆを浴ゝく銭でおぢんあん

ばんよしをこのつてそうかと中間まくし煙草をのん
で喜世留をおくるまもかん首ゝふさると嵐ゝさ
をするこてあとあり御町いまつとりちんをそう
咸程世間まハいろくゝ者ゝある様へまさ
ゝてしまあざアちあうをうこふくとおりて
ちくゝ心ばくをきひをうどふゝするとさん
めうをおりうといつこうちらしひゝ口くちよ

をつて居りてきまもよといつよおるゝあむ
さん口くすぶつと二度氣の毒よりゝ
そうやアちきよりをうまもくいひまくくん
をしてゝる処へうつさをいくだゝけとやこま物
屋のお板おすきやそでござうますあゝくた
町さんくふハでくぶやつれさ祇大くさ四ゝ屋
具那ゝおとまりうで評ぬハちよゝうぶさふ

おやゝ〳〵いやな後へとあ[illegible]
もあるやつらりおあるいだまうんでぬるりしてコタ
松坂さんおめよんべやどろくといのやつこのお
らよくきいてゝそぜ何さらこらら所の松さん
ハ此間ハきてゝ云れてそふさらつきし肉まやア
ぬやせんとやアあるまる所くのやう後へのと
いつ丸ちやアありやちんらかきやゝ子供の後へ

おやアおしてゝとけをいひやしこのサれあるを
すこしさあうけて何おめへのちふりんをも久し
ひ物サ此時お町へを一ツ指おやらゝやま
い後とあどけあいのもそれゝやあるこのこの
さまもゝらハまけおしをまとうふ屋蔵
よ後とあてゐるうちよう芝居出しで今の小
間物屋の足よあうおばごの西ゝの柳

茶うす金糸紋羅金くるの帯をゐて
きうしの丈も曲り物とをんし一ちゃい
二度のあくそう土弓の出女とあり合もいが
ちうまきるすうと丁金のおれくをさし四寸的
煙草入とあつてゐるあとある中おれの人
ようハさんきあつくく火の中水の底と焼
豆腐郭くよみかた文句もいひ合しおらんろ

おさんハ黄花を持てきてまして出すを
お秋ハうけとりヨヤあるまうごごけどよくあて
ちうおさんどんおめく前さよりきう出うよどん
ぢけをもつて火てあぶり後おめいとうでうつ
八反の切さの字ちやアこと火中重ふあて
つちやア絵どい勘学院の雀あるへしくこ
人のちさるて朝市のせりものハ物うへこの

処どころ筆まもかきとゞめ既に日天心に至
る行くゝ路次千駄くしまゝく米法さハ就後
の山よあやを流し模木割ハけやきの口てゝ
一長のかをあつむあきゝ人の声さまくゝて言
が絵ゝりちやとゝろ〳〵まゝきゝよ「ちゝのすげゝ」
「とゝろ〳〵茶とんだちやてごぜん」お町ハすむるを
呑てのゝうしゝあやくゝいひ所へきゝるちや

法け茶とんをゝと移〳〵されハゝ移〳〵さんや
よんでゝるやゝふれゝるハゝつゝゝておめく
さんハいゝりでも物のゝひようゝゝ人ゝひとゝ
しゝ法けてあけきやちゝと臺所へそゝゝ
おめくゝちらゝるゝいくゝらゝゝちのあゝつき
のいひのよ茶とんだちゝ屋ハちゝごゝとゝろ
あゝ二百五十でごゝりきそれぢゃた

く百三十二文よりあるかとし志あんをして
あんでおしさすのでもぬりたのきたさの
ぬるくまるもくしひきやれとそのいがをま
けあるをどゝあ板とこ人よりひまちれのう
すちしごとをうんとすてぢうふるゆけいるち
ちふいふさづきうどゝ板へけつまづきむざんか
るうふ石へあうり四百めどんづう六百の四

ちうものうぢぢ見れてあきさへハあるハ門口よ
見てぬうちしうお町さんくあの茶とんだち
やうまげ板くとちてこちんざくちひやくこう
ちう板をはけもそんふとれてあまひやしこ
町ハびつうりしてそんあらうちうちうちう
もくおあるハあの志れさてきお町い志のの
あうをふふ石でちんくく板へてようさぬく

此末の草稿皆屋とハ妄説うけこの
所ハ冊小冊おきり入り書房の米匣
をうつ後編ハいつあることや著て
でゝまゝナンヒ 往言の

やまあらし 畢